



Title	クレモナ司教リウドブランドの「苛立ち」：『コンスタンティノーブル使節記』の背景
Author(s)	大月, 康弘
Citation	一橋大学社会科学古典資料センター年報, 18: 14-22
Issue Date	1998-03-31
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	http://doi.org/10.15057/5442
Right	

クレモナ司教リウドブランドの「苛立ち」
——『コンスタンティノーブル使節記』の背景——
“Displeasure” of Liudprand, Bishop of Cremona
— Background of his *Relatio de Legatione Constantinopolitana* —

大月 康弘
OTSUKI Yasuhiro

異文化理解や国際化が重要であるという。モダンで合理的な普遍世界を想定することが困難となった昨今では、それぞれの文化の個性を前提とする文化融合が焦眉の課題だといっているのである。そのような状況のなかで、我々は外交やビジネス、日常生活を巧くやっつけていかなければならない。相手文化への深い理解と利己的関心。地球市民なるものが容易には成立しえない現状にあって、各文化の平和的共存こそが今日的な目標であるというのだ。

それは、ある意味ではいつの世でも同じだった。外交や交易は、程度の差こそあれいつも異文化接触の場であった。その場に立つ者は、相手との対話を成立させながら、所期の目的を達成しなければならない。使命を帯びた者の場合、責任はなおのこと重い。状況次第では摩擦も避けられない交渉の場で、彼は平和裡に問題解決を図らねばならない。両者の関係が険悪になった局面での交渉ともなれば、事態はことさらだったろう。諸事実に対する認識の違いもあれば、ことばの相違による意味の齟齬もあったにちがいない。

1

ここに一冊の外交使節記がある。著者は北イタリアの町クレモナの司教リウドブランド Liudprand, sanctae Cremonensis ecclesiae episcopus。いまから千年前の10世紀半ば、地中海世界を舞台に活躍した聖職者・政治家である。この『コンスタンティノーブル使節記』*Relatio de Legatione Constantinopolitana*（以後『使節記』）は、彼がザクセン朝のオットー1世（在位936年-973年5月）の名代としてビザンツ帝国の帝都に派遣された際（968年6月4日～10月2日）の模様を、主人オットーへの報告書の体裁をとって書き綴ったものである⁽¹⁾。

リウドブランドは、ランゴバルド系の裕福な家柄に920年頃生まれ、おそらく973年5月5日以前に没した。少年時代にイタリア王フゴ（アルルのフゴ）Hugo, Arelatensium seu Provincialium comes, rex（在位927-947年）の宮廷に出仕して故郷バヴィアの助祭を勤めた後、イヴリア侯ベレンガリウス2世 Berengarius II, Eporegiae (=Ivriae) civitatis marchio, rex（†966）の尚書院に出仕した。その後、この主人と仲違いをしてオットー1世のもとに逃亡。その聖堂に勤務したのちに、オットーのイタリア政策に従いイタリアに戻り、962年までにはクレモナ司教に任ぜられていた。

リウドブランドは、その生涯を通じて少なくとも3度コンスタンティノーブルに赴いている。2回目となる今回の訪問は、後述のように困難な状況の中でのミッションだった。半ば予想されたとはいえ、ビザンツ側の対応は最初から冷ややかなものだった。それは初日から不愉快きわまりないものとなった。

「我々がコンスタンティノーブル、カレア門の前に到着したのは6月4日でした。そし

て、尋常ならざる雨の中、11時（今日の午後6～7時頃……大月）までずっと馬とともに待たされたのでした。実に11時になって、ニケフォロス（ニケフォロス2世フォーカス）は、我々が陛下のご配慮により馬を備えていたのに、騎乗することは分に添わないと考え、徒歩でやってくるように命じてきました。そして我々は、大理石で出来た、水の通っていない、忌むべき広い宮殿まで連れて行かれたのです。」

ビザンツ側の冷遇に、リウドブランドは終始苛立っていた。ビザンツ皇帝ニケフォロス2世フォーカス（在位963-969年）は、その後体調を崩したリウドブランドをこの「忌むべき広い宮殿」に長く留め置いて無為に時間を過ごさせたばかりでなく、オットーが帯びた「皇帝」タイトルの使用と、オットーへのイタリア諸侯の帰順（後述）をめぐって指弾を重ねるだけだったのである。

「私は、陛下の皇帝位の名称について大議論を行い、疲れました。と言うのも、彼は陛下のことを皇帝、つまり彼らの言葉でバシレウスとは呼ばずに、不本意なレーガ、つまり我々の言葉で王と呼んだのです。私が彼に——たとえ表現が異なっているとしても——その意味される内容は同一であると述べると、彼は、私が和平のためにではなく争いのためにやってきたと言うのです。」

リウドブランドは、この滞在で受けた冷遇に応酬して、この『報告記』のなかで、自らが見聞したビザンツ人の思考と行動のいちいちを嘲笑し罵倒した。彼は、シニカルかつ臨場感溢れる筆致でニケフォロス2世を嘲罵し、その宮廷事情から、皇帝歓呼礼 *Acclamatio*、五旬祭 *Pentecosta* などの儀式的の進行次第、宮廷晩餐会の模様、またビザンツでの日常生活、出会った人物たちについて皮肉たっぷりに記したのである。

デフォルメされたそれら記述は、とてもそのまま事実として受け入れられるものではない。偏見や誤謬に満ちた記述内容であるが故に、歴史資料としては無価値としたヴァッテンバッハの見解は、たしかに一面において正鵠を得ているのである⁽²⁾。しかし、資料は客観的事実の取材源としてだけ存在するのでもないだろう。なぜリウドブランドはそのような嘲罵を浴びせたのか。執筆の動機や意図を当時の政治的・文化的文脈の中に位置付けることで、それは、当該社会の様々なコンテクストを考察しうる格好の素材ともなるはずである。M・リンツェルによれば、リウドブランドは、この訪問時のビザンツ側の態度を告発し、オットー側の士気を高めるために『使節記』を執筆したという⁽³⁾。リンツェルによれば、『使節記』執筆の動機はまさに政治的宣伝にあった。それは「ビザンツへの反感と憎悪を全ての方向にわたって煽り立てようとする公的なパンフレット」だったというのである。

ここでは、この興味深い文書の分析に先立ち、その周辺事情について若干ご紹介しておくことにしたい。

2

リウドブランドは、一貫してオットーに影響を与え続けた有力な助言者だった。側近としてしばしばオットーに同行し、962年2月にオットーが「皇帝」に推戴された場にも、リウドブランドは臨席していた。963年には、オットーの特使としてミンデンのランドヴァルド *Landohardus Mimendensis* とともに、反抗的な教皇ヨハネス12世のもとに赴き、彼を更迭した教会会議では主人の代理として活躍している⁽⁴⁾。『オットー史』によると、965年リウドブランドはシュパイエル司教オトガルとともに、オットーの代理として再びローマに赴いており、そ

これは新教皇が選出されつつあったときだった。リウドブランドが署名したり、彼のことに言及する文書類は、966年から967年にかけて彼がオットーの側近であったことを示している⁶⁵。

たしかにリウドブランドは、オットーにとって貴重な人材だった。彼は北イタリアに豊かな人脈をもち、「世界」情勢について幅広い視野をもっていた。しかも、最初のコンスタンティノーブル訪問時に卓抜したギリシア語能力をも身に付けていた。

リウドブランドが前回ベレンガリウス2世の使節として赴いたのは、949年9月17日～950年3月のことだった。このとき彼は、皇帝コンスタンティノス7世ポルフェロゲネトス（在位913-959年）の知遇を得て歓待を受けていた。「世界」情勢や有職故実に関心の深かった同帝のために、リウドブランドはイタリア情勢について情報を提供させている⁶⁶。ところが、今回は状況が一転していた。マケドニア朝（867年-）の正統なる血筋は、コンスタンティノス7世の息子ロマノス2世（在位959-963年）をもって中断し、いまや、一世紀にわたってアラブ勢力の支配下にあった東地中海の要衝クレタ島を961年に奪取した元軍司令官ニケフォロス2世フォーカスが帝位にあった。

当時、キリスト教世界はひとつの転機を迎えていた。西方では、ザクセン朝のオットー1世が、936年の即位以来、諸侯・有力者たちに対する支配を強め、次第にアルプス以南にもその実質的勢力を伸ばしつつあった⁶⁷。イタリア、特にその南部地域は伝統的にビザンツ皇帝の支配にあったが、後に詳述するように、オットーはこの地域に進軍して968年3月には南イタリアの都市バーリを攻囲していたのである。その間に、彼は都市ローマに入城し、2月2日に「皇帝」のタイトルを帯びていた。

このとき、リウドブランドはオットーと行動を共にしていた。リウドブランド自身の主張によれば、「勝利者」オットーを説得して「バーリから軍を引かせ」、コンスタンティノーブルとの外交交渉を再開させたのは、ほかならぬ彼自身だった。こうしてコンスタンティノーブルに派遣されることとなったリウドブランドの使命は、イタリア半島における領土問題に決着を付けること、そして問題解決のための一方策として、王子オットー2世の後となるべきビザンツ皇女の迎え入れに道を付けること、にあった。

3

イタリア半島におけるビザンツ帝国領は、6～7世紀のランゴバルド族の進出過程の中で縮小をよぎなくされていた。ラヴェンナは751年に帝国の手を離れ、リグーリアはそれ以前にランゴバルド領になっていた。リウドブランドの時代には、ビザンツはアプーリア、カラブリア地方を支配するにとどまり、後述のように、ローマ、ヴェネチア、ナポリ、ガエータ、アマルフィに対する宗主権を主張していた（図1）。

6世紀以来、ランゴバルド人は北イタリアの地に満ちていた。彼らの王は、リウドブランドの故郷の町パヴィアかミラノ、あるいはモンザの町に宮廷を持っていた。さらに、これとは別に、ランゴバルド系侯領が、中央イタリアではスポレートで、南イタリアではベネヴェントで興っていた。これら侯領は名目的には北部の王国に従属していた。しかし、その従属はあくまで名目的で、実質的なものではなかった。

ランゴバルド王国は、その全盛期には教皇庁を脅かすほどにまで勢力を伸張。これが原因で教皇庁がフランク族にイタリア遠征を要請することになったのはよく知られている。フランク王カールは、774年にランゴバルド王国と衝突した。そして、北イタリアのランゴバルド系支

配階層を排除し、フランク系貴族を置いた。カールは、ベネヴェントにあった独立のランゴバルド系侯国の宗主権をも手にする。しかし、これは名目的なものにすぎなかった。ベネヴェントはカールの力の及ぶ範囲のままに最前線であり、この町はまさに独立の小国家だったのである。その支配者と有力者たち *gastaldi* は、イタリア半島南東部の諸都市の代表だった。もう一つのランゴバルド系公国スポレートもまた、独立の傾向を維持していた。しかし、こちらはフランク系の支配家門を受け入れた。スポレートの公たちは、9世紀後半から10世紀前半にかけての時期、都市ローマに対する強い支配力を行使し続けている。

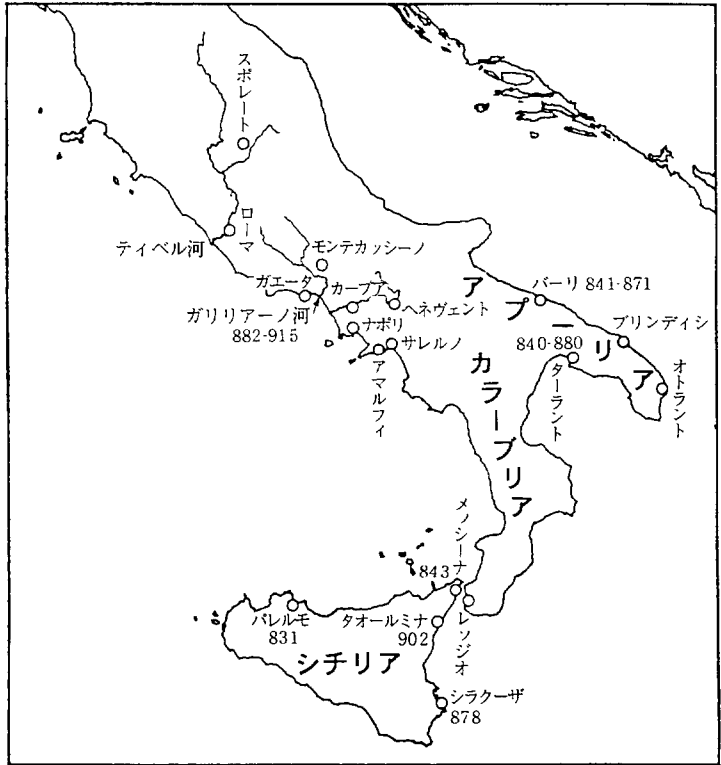


図1 9世紀末-10世紀初頭の南イタリア、シチリア
(記入年代はアラブ人による占領期間を示す。)

ランゴバルド人たちは、イタリア全土にわたって、文化的にも言語的にも土着のラテン系住民と混住していた。西フランクシアにおけると同様に、イタリアにあっても主要言語はラテン語だった。カールによって導入されたフランク系支配階層は少数派であり、彼らは残存するランゴバルド系の在支配階層と手を結んだのである。「フランク人」の王によるリウドブランドの外交使節登用もまた、この線で考えられなければならないと思われる。『使節記』のなかにも、リウドブランドは、自らが属する「ランゴバルド人」*Longobardi* を「ゲルマン人」*Germani* と意識し、コンスタンティノープルの宮廷での論争において「フランク人」*Franci* との同胞意識を強調している(第12節)。そのような意識をもつリウドブランドは、古典の著述家たちの作品を繙読し、「傑出した歴史を有する町」パヴィアの名誉ある市民としての自覚を強く持っていた。

4

リウドブランドの若年時には、イタリア王はフランク系の2つの家門から出ていた(図2を参照)。9世紀末の段階では最終的には、フリウリ侯ベレンガリウス1世 *Berengarius I, Furiar marchio, rex* (†924) が北東部の本拠地から出て、898年末までにイタリア王の地位を確保していた。899年秋までに、皇帝ルードヴィヒ2世 (†875) の孫であるプロヴァンスのルイ *Lodovicus (Lewis) III* (†928) が、ベレンガリウス1世のライバルとして名乗りを上げた。しかし、紆余曲折の末、905年ルイはベレンガリウス1世によって捕らえられ、目を潰されたの

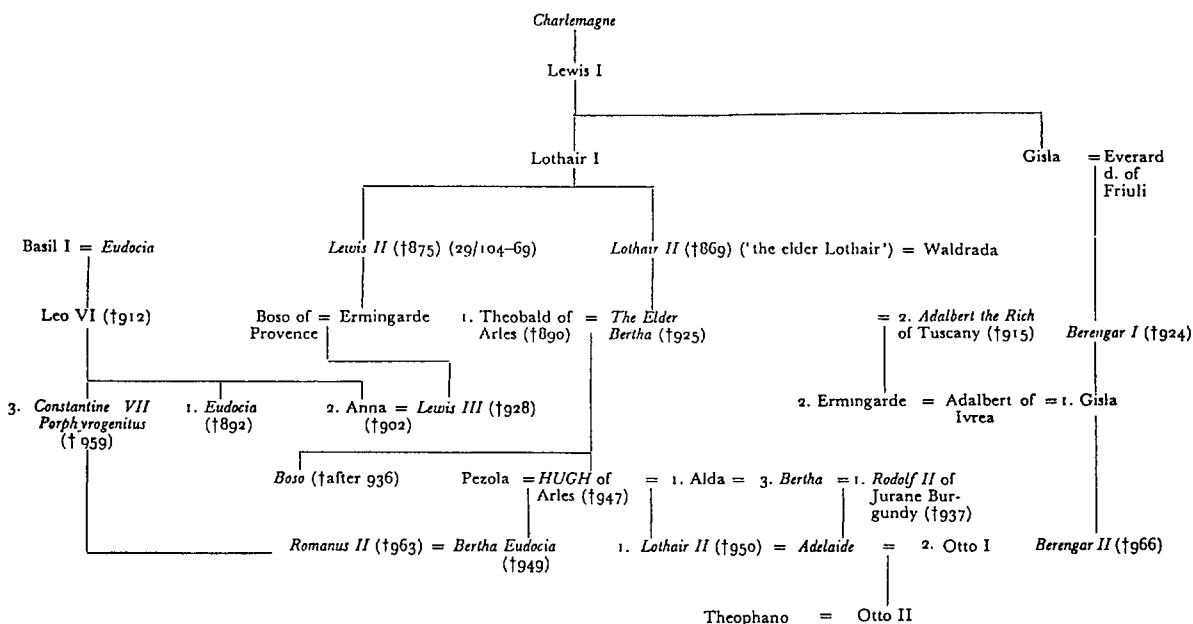


図2 9～10世紀イタリアをめぐる関係系図

出典：Constantine Porphyrogenitus, *De Administrando Imperio. Vol. II: Commentary.* ed. R.J.H.Jenkins, London, 1962. p.84. を補訂

ち、928年に没するまでのその後半生をプロヴァンスで何の後ろ盾もなく過ごしている。その後、ルイの従弟フゴが、ときの教皇ほか数名の貴族たちの協力によって王位に就き、926年から947年までその地位を保持することに成功した。しかし、947年になって、ベレンガリウス1世の孫でイヴリア侯であったベレンガリウス2世が、フゴの廃位に成功する。『報復の書』の中で、その妻ヴィツラ Willaとともに一貫して悪人として描かれているベレンガリウス2世。彼は、自身を実質的な支配者としながら、フゴの息子ロタリウス2世 Lotharius (Lothar) IIを王位に就けた。ところが、フゴは947年に没し、ロタリウス2世も950年に死去してしまった。こうしてベレンガリウス2世は、950年の12月、自身の息子アーダルベルトゥス Adalbertusとともに共同王として登位したのである。オットーは、951年9月パヴイアにあって、この兩人の臣従礼を受けている。

9世紀の後半、カール大帝の後継者たちの勢力が弱体化すると、イタリアの住民たちは遠方にいる皇帝よりも身近な有力者に保護を求めようになっていた。皇帝はもはや、外国の侵入者や地方の侵略者に対抗できるような援助を約束できなくなっていたのである。中部イタリアもまたその埒外ではなかった。皇帝ルードヴィヒ2世は、すでに846年ローマをイスラム教徒の脅威から守ることに失敗していた。このとき略奪者たちを追い払ったのは、ローマの北隣りにいたスポレート公グイスカルドゥス Guiscaldusであり、以後1世紀を越える期間、スポレート公領とローマは、緊密な関係のもとに置かれるようになる。この期間、教皇たちは、伝統にならって、アルプスの北のカロリングの王たちに援助を求めてはいた。しかし、彼らは、より確実な防衛のためには、イタリアでの短命に終わることの多かった王たちと同盟しなければならなかったのである。教皇の権威は低下し、その力の及ぶ範囲も次第に中部イタリアに限定されていた。収入もまた所領の縮小によって限りあるものとなっていた。

この時期の教皇たちは、都市ローマの貴族とローマ教会の高位役職者とからなる緊密で小さなサークルから選出されており、かつ頻繁に入れ替っている。882年のマリヌス1世から914年のヨハネス10世までの32年間に15名、ヨハネス10世の死んだ928年からマリヌス2世の死んだ946年までの18年間に6名の教皇を数えた。920年代以降、ローマ市と教皇庁は、次第にテオフィラクトゥス家の支配のもとに置かれるようになっていた。同家の娘マロツィアは、父テオフィラクトゥスの指示で、数度の結婚をした。相手は、スポレート公アルベリクス、トスカナ侯グイスカルドゥス、そして最後にイタリア王であるアルルのフゴである。これによって打ち立てられた同家の勢力を、彼女は思いのままにした。マロツィアとその息子アルベリクス（†954）は、ローマ市をほぼ思いのままに支配した。彼らは、教皇を立て続けに立て、そのうちの幾人かは彼らの親類であった。アルベリクスは、断固としたローマ派であり、リウドブランドの最初の主人アルルのフゴの対ローマ介入を数度にわたり退けている。

ローマを、教皇ではなく寡頭政治が支配し、その中でもある一家門が支配しているという状況は、リウドブランドたち北イタリアの教会人には不自然に映ったようである。オットー1世がローマを「救済」する以前にはこの町は頹廢していた、とリウドブランドはビザンツ宮廷での論戦の中で強調している（第4節、第5節、第17節）。「あなたの主人（オットー）は武装蜂起によって自らをローマの主人とした」とのビザンツ皇帝ニケフォロス・フォーカスの糾弾に対し、リウドブランドは、オットーはローマを「圧政者たちのくびきから」解放したのだと応酬している。マロツィアたち娼婦ども *meretrices* からローマを解放したのである、と。

ローマでは、954年にテオフィラクトゥス家のアルベリクスが死去した。彼の息子は、教皇権と公権を一身に帯びていたが無能で、北からローマに進出したベレンガリウスと組んだ内部の敵に取り巻かれて、オットーに援助を求める始末であった。オットーはこれに応じて、962年2月南からローマに入城した。そして教皇より皇帝として戴冠されたのである。この事態はローマ内では不評で、オットーに対する相次ぐ反乱が起こった。そのもっとも深刻な暴動は965年に起こり、この時にオットーの画策により就任していた教皇ヨハネス13世が追放された。この暴動はオットーによって容赦なく鎮圧され、その苛烈さは『使節記』第4節で皇帝ニケフォロスによって批判されている。

「かの者（オットー）は、かように敵対的な侵略によってローマを我がものとし、ベレンガリウスとアーダルベルトゥスから、法と道理に反して、力によって領土を横領した。彼は、ローマ人のある者たちを剣で、ある者たちを絞首刑で排除し、ある者たちについては眼を奪い、ある者たちは追放刑によって追い出した。そしてこれに加えて、我が帝国の都市の数々を殺戮と火災によって自らに従わせんと企てた。」

5

いったんローマ政策に巻き込まれると、オットーはさらに南のイタリア問題に引きずり込まれることとなった。ビザンツは、902年をもってイスラム教徒にシチリア全島を奪われ、帝国に残されていたのは今日で言うカラブリアとアプーリアだった。ビザンツはバーリを拠点としてこれらの地方を支配していた。これら地域は、ビザンツの行政上2つのテマ（属州）から成っていた。カラブリア・テマは、半島の踵とつま先を含む地域で、かつてシチリア島をも含んでいたところから通称シチリア・テマと呼ばれていた。他方、ランゴバルディア・テマは、現代のアプーリアの大半を含む地域だった。カラブリアの住民の大半はギリシア人で、シチ

リアからの逃亡者で溢れていた。他方、アプーリアの住民は、主にラテン語を話す元来の住民の子孫とランゴバルド系の征服者だった。しかし、バーリの南部にはギリシア人も多く居住していた。

ベネヴェントのランゴバルド系侯領は、南イタリアにおいて、他の諸国家に比べて最も独立の度合いが強い国家だった。ベネヴェントは、9世紀の半ばの混乱した時期に、サレルノが抜け出て第2のランゴバルド系小国家を形成していた。カープアもまた、一時期ベネヴェントから離れていた。しかし、オットーのイタリア進出の時期までには、再びベネヴェントに併合され侯国の首都となっていた。カープアは、ベネヴェントよりも戦略上重要な位置にあったのである。ベネヴェントは、カール大帝の宗主権を認めており、871年には、フランク皇帝ルードヴィヒ2世に対し、バーリからのイスラム勢力の排除を要請してこれに成功していた。フランク王のアプーリア問題への関与は、リウドブランドによってビザンツ宮廷での議論の中で持ち出されている。ベネヴェントのランゴバルド系侯が、カロリング朝の正当なる後継者たるオットー1世の臣であるという議論においてである（『使節記』第7節）。

しかし、カロリング朝末期の諸王は、アルプス以南の地域に対して実効的な権力を行使できなかったのもあって、それは、ベレンガリウスやアルルのフゴのようなフランク系有力者の勢力を増大させることとなっていた。このことは、半島の南部における幾多の群小侯領をビザンツ勢力に帰順させることとなった。それは、915年にビザンツがナポリ北郊を流れるガリリアーノ河流域の勢力圏からイスラム教徒を駆逐させた際に組んだ連合以降、顕著となった。これ以後、コンスタンティノーブルの皇帝は、サレルノ、ベネヴェントのランゴバルド系諸侯、またナポリ、アマルフィ、ガエータ等の海洋都市国家の支配者たちから宗主権者として認められたのである⁽⁸⁾。

リウドブランドがコンスタンティノーブルで相対しなければならなかったビザンツの役人たちは、当然のことながら、ランゴバルド系諸侯の臣下的地位を強く主張した。ランゴバルト系諸国家のビザンツへの従属は、すでに薄れていたカロリング帝国との結び付きよりも、10世紀初頭の段階でははるかに現実的だったのである。ベネヴェントとサレルノの侯はビザンツの爵位パトリキオスを帯び、これは彼らがビザンツ世界の一部を成していたことの確認であった。ランゴバルド系諸侯に関する史料は、コンスタンティノーブルの皇帝の統治年で記年されている。サレルノは、ビザンツの守備隊を受け入れ、地元のランゴバルド系有力者たち *gastaldi* は、ビザンツの役人となっていた。ビザンツ属州との国境に近いベネヴェント地方では、ランゴバルド系とギリシア系の役人が、並行的に職務を行っていた⁽⁹⁾。

しかしながら、920年台以降、南イタリアにおけるビザンツの影響力は後退局面に入っていた。921年、カープア＝ベネヴェント侯のランドルフ1世 *Landulfus Beneventanorum et Capuanorum princeps*（在位910-943年）が、アプーリアに駐屯していたビザンツの守備隊を攻撃し、926年には、ランドルフとサレルノ侯グアイマール2世 *Guaimarius Salernensis princeps* が連携して再び攻撃を仕掛け、戦いは断続的に934年まで続いたのである。936年と940年、また946年にも戦闘が行われている。リウドブランドが『使節記』の執筆に取りかかった頃には、ランゴバルド系諸侯はパトリキオスの爵位を返上していた。

ランドルフの後継者カープア＝ベネヴェント侯パンドルフ1世 *Pandulfus*（在位961-981年）も、オットーのローマ政策を支持した。彼は、967年までにオットーに対して臣従礼をとり、その結果、オットーからスポレート公位を与えられている。967年2月とその翌年、オットー

はベネヴェントを訪れ、その間にビザンツとの外交交渉が展開されていた。皇帝ニケフォロス・フォーカスの使節がラヴェンナでオットーに会見し、それを受けて、ヴェネツィア人ドメニクス Domenicus 率いる使節がオットーによって派遣されたのである（『使節記』第25節、第31節）。

ビザンツ側からすれば、ベネヴェントは、パンドルフによって間接的に統治されていたとはいえ、ランゴバルディア・テマの一部であった。第2のビザンツ使節がオットーのもとに派遣され、この使節は968年1月にカープアでオットーに会見している。この使節が何か新しい提案をしたかどうかは、残念ながら知られていない。オットー側は、将来の外交交渉のための取引材料として、ビザンツ領の一部を獲得する心積もりだったようである。オットー軍は968年3月にバーリにまで進軍したのである。ところが、さすがのオットーもこの町の前で立ち止まらざるをえなかった。艦隊をもっていなければこの町を占領することは不可能だったのである。リウドブランドが、自身の提案によりコンスタンティノーブルへの使節に派遣されたのは、まさにこの抜き差しならない時期のことだった。

6

リウドブランドは、所期の目的を果たせぬまま、4ヶ月滞在したコンスタンティノーブルをあとにした。滞在期間中の模様を伝える『使節記』は、叙述としては不完全なかたちで終わっている。それは、リウドブランドがイタリアに戻る途上、969年1月にコルフ島から出発する場面で終わるのである。コルフはビザンツ側の西における前哨基地だった。リウドブランドは、この地でもコンスタンティノーブルで味わったと同じ退屈な滞在を強いられ、最後まで苛立っていた。

その間、オットー1世は、リウドブランドからの報告が来ないままに968年秋いったんラヴェンナに戻り、同年末ふたたび南方に進軍して、カープアでクリスマスを迎えていた。カープア＝ベネヴェント侯パンドルフを従えて、アプーリア、カラブリアをふたたび席卷したのち、ビザンツ側の都市ボツヴィノの攻囲をパンドルフに委ねて北方へ帰還したのが、969年5月のことだった。リウドブランドもこのときまでにはオットーに合流していた。その後、両勢力は南イタリアを舞台に一進一退を繰り返す。そして、969年末ビザンツで事件が起こった。リウドブランドを冷遇した皇帝ニケフォロス2世フォーカスが、ヨハネス・ツイミスケスやミカエル・ブルツェスをはじめとする貴族たちによって殺害されたのである。

オットーとニケフォロスの南イタリアでの衝突は、決着がつかずにいた。リウドブランドの派遣以後、両者間では外交交渉も絶たれていた。しかし、新皇帝となったヨハネス・ツイミスケスは、自身の生き残りに懸命で、この地での戦いの継続に消極的だった。こうして、状況は急速に変化することとなる。971年、ケルン大司教ゲローを団長とするオットーの大使節団が再度コンスタンティノーブルに派遣され、この使節団は、それまで断固として拒絶されたオットー2世の花嫁を得ることに成功したのである⁽¹⁰⁾。オットー側が望んでいた「緋室の生まれの皇女」Porphyrogenitaではなかったが、オットー父子は、971年にツイミスケスの姪テオファノを迎えたのだった。この交渉のなかで、オットーは、アプーリア、カラブリアをビザンツ側に放棄する代わりに、「皇帝」（「ローマ人の皇帝」ではなく、一介の皇帝である）の称号を認めさせ、さらにパンドルフの支配するカープア、ベネヴェントを確保した。

さて、オットー2世とテオファノの婚儀は、971年4月14日ローマの聖ペテロ教会で盛大に執り行われた。ドイツのヴォルフエンビュッテル市古文書館には、このとき作成された婚札証

書が保存されている。それは、この婚儀に対する父帝オットー1世の熱意のほどを伝える逸品である。この豪華な証書には、当時西方では入手が困難であった紫貝から抽出された「緋色」porphyrosの彩色が施され、オットー1世が、コンスタンティノープルの皇族の一員を息子の嫁に迎えるに相応しい対応を、まさに孜孜として準備したことを窺わせるのである。

自己／他者認識の構造は、それぞれの時代と社会に固有なものとして存在している。それに基づく「摩擦」のあり方もまた同様だろう。様々な事件や文書中の文言の意味は、そういった当時の社会の通念や作法を前提としなければ理解できない。我々のものとは異質なそれらを的確に剔出すことは困難な作業にはちがいない。しかし私は、リウドブランドたち千年前の地中海世界の人々との付き合いの中で、それ自体重層的な当時の「意味の関係性」分析の面白さを今さらながら感じている。リウドブランドの『使節記』執筆の動機と意図は何であったのか。この文書のなかに何を読みとりうるのだろうか。ここでは、その作業に先だって、周辺事情を若干ご紹介したまでである。

注

- (1) リウドブランドは、この『使節記』のほかにも数編の歴史叙述を残している。888年から948年にわたるビザンツ・ドイツ・イタリア間の歴史を扱った未完の長編『報復の書』Antapodosis, また、オットーとローマ教会との960年から964年までの関係の変遷をほぼ網羅的に記述し、公式報告書の性格が強い短編『オットー史』Historia Ottonisである。これらは、ヨゼフ・ベッカーの校訂・編集により Monumenta Germaniae Historica (MGH) の学校用版に収められている。Becker, Joseph, *Liudprandi Cremonensis episc. opera. Editio tertia. Recogn. J. Becker. Die Werke Liudprands von Cremona.* [MGH SRG 41.] (Hannover-Leipzig, 1915) リウドブランドのこれらの著作、とりわけ『報復の書』の史料的価値については、上原専録「クレモナ司教リウトブランドの『報復の書』—十世紀の一歴史叙述における動機と志向—」【一橋論叢】26-5 (1951年11月), また『クレタの壺』(評論社, 1975年。【上原専録著作集17】, 評論社, 1993年)所収, を参照のこと。
- (2) Wattenbach, Wilhelm, *Deutschlands Geschichtsquellen im Mittelalter*, 1. Band, 1. Häfte. 6. Aufl. Berlin, 1894. S.425.
- (3) Lintzel, Martin, *Studien über Liudprand von Cremona.* (Historische Studien, Heft 233) 1933. S.54.
- (4) Hist.Ottonis, VII, XI.
- (5) Becker, MGH, Einleitung, p.x.
- (6) コンスタンティノス7世編纂の『帝国の統治について』第26章, 第27章のイタリア情勢に関する記述。Constantine Porphyrogenitus, *De Administrando Imperio. Vol. I: Text.* Revised Ed. by Gy. Moravcsik, tr. R.J.H.Jenkins. Washington, D.C., 1967. p.108-119. 他方リウドブランドは、この訪問について『報復の書』第6巻で記している。
- (7) オットーの最初のアルス越えは951年のことだった。この年, オットーは、アーデルハイダと結婚した。彼女は、アルルのフゴの息子でありイタリア王であった故ロタール2世の寡婦だった。
- (8) Gay, J., *L'Italie méridionale et l'Empire byzantin depuis l'avènement de Basile I^{er} jusqu'à la prise de Bari par les Normands (867-1071).* Paris, 1904. p.163.
- (9) Gay, *op.cit.*, p.176-177.
- (10) 例えば, Lounghis, Telemachos C., *Les ambassades byzantines en Occident (407-1096).* Athènes, 1980. p.206.

(一橋大学経済学部助教授)